

研究論文

発達障害特性による大学生活の困難性への支援 —自閉症スペクトラム障害に対する大学生の援助意識に関する調査—

Support to the difficulties of the college life by the traits with developmental disorders
—The attitudes of helping of university students for autism spectrum disorder—

宮崎 紗織¹⁾
Saori Miyazaki

中田 洋二郎²⁾
Yojiro Nakata

佐藤 秀行²⁾
Hideyuki Satoh

永井 智²⁾
Satoshi Nagai

田村 英恵²⁾
Hanae Tamura

本研究では、自閉症スペクトラム障害に焦点を当てて、発達障害の特性に関連する学生間の相互支援の在り方について検討する事を目的とし、大学生活において発達障害の特性によって生じやすい困難さに対して、周囲の学生はどのように理解し、その困難さに対して援助するか否かなど、大学生の援助意識についての実態調査を実施した。

その結果、援助が必要と考えられても援助の手だてを見つけることが難しいこと、学生は困難さを抱える学生との社会的距離によって援助の可否を判断していること、しかし、その一方で困難を抱えている学生が親しい友人である場合においては援助を惜しまないことなどが示唆された。これらのことから、大学として発達障害のある学生に対して、発達障害の知識について啓発を慎重に検討していくことが、今後の課題として考えられる。

【キーワード】 自閉症スペクトラム障害, 大学生活, 援助意識, 特別支援教育

I. 問題と目的

大学での発達障害の支援の現状

文部科学省は、2011年に「障がいのある学生の修学支援に関する検討会」を設置し、「障がいのある学生の修学支援に関する検討報告会（第一次まとめ）」を発表した。この動きは、2006年に国連総会で採択された障害者権利条約の締結に向けた取り組みの一環であり、社会的にも重要な意義を持ち、今後の大学における障害のある学生への支援を強く後押しするものである（桶谷、2013）。発達障害のある学生の支援にあたり合理的配慮のあり

方、すなわち学生の「権利を保障する」と同時に大学機関へ「過度な負担を課さない」支援のバランスが重要となる（高橋、2012）。具体的には大学がどれだけ発達障害のある学生の支援に費用を掛けられるのか、同時に支援を受ける学生の自主性や自律性を損なわないためにはどこまでの支援が適切であるのかなど、大学における発達障害の支援のあり方については現在模索の段階にある。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（2008）は、国内の高等教育機関を対象として現在の大学で行われている支援について、「発達障害のある学生の支援に関する全国調査」を行った。発

1) 品川区教育委員会 Shinagawa City Board of Education

2) 立正大学心理学部 Faculty of Psychology, Rissho University

達障害を抱える学生にとって大学生活でまず大きな障壁となるのが、履修に関わる問題である。なぜなら、一般の講義は受動的に受講することで履修が可能であっても、発達障害による様々な特性によって、ゼミでの発表や実習での共同作業など、能動的なコミュニケーションや人との関わりが生じる場面では、不適応な状態が生じやすく、日常の大学生活の中で、発達障害のある学生は様々な問題を抱えているからである（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所, 2008）。しかし、調査では「学業支援・テスト・評価」に関わる支援は少なく、学業に関する支援は大学内での共通認識の枠組みや支援を実施する基準・根拠の策定が難しく、多くの大学では学内関係者の理解を得る啓発活動の段階であることが示唆された。

学業への支援体制が整わない段階で、発達障害のある学生に対する援助は、学生相談室など学生相談機関が大学生活の悩みや困り感を抱える学生に個別のカウンセリングで対応しているのが現状と考えられる（川住ら, 2010）。学生相談室や保健センターを利用している学生であれば、相談担当者が学生を支援できる学内部署・関係者等に働きかけることで、学修上の支援に結びつけるケースもあろうが、そのような学内の学生支援サービスを利用していない学生の場合には、まったく大学として対応できていないケースも少なからず存在するだろう。このような自ら援助を要請できない発達障害のある学生の場合、彼らが大学生活を適応的に送る為には、教職員のみならず周囲の学生の理解や気づきも必要であり、大学全体での支援のあり方を考えることが必要である（岡本ら, 2012、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所, 2008）。

大学生の発達障害に関する理解と知識について、岡本ら（2012）は国立大学の大学生398人に対して、アンケート調査を実施し、一般の学生が発達障害に関してどのように理解や認識をしているのかを調査している。その結果、「発達障害について知っている」と回答する学生が少数であるにも関わらず、「発達障害者との関わりにコミュニケー

ションの難しさを感じたことがある」と回答した学生が多数を占めたことから、周囲の学生は、発達障害に関する正確な理解や知識をもっておらず、発達障害のある学生との関わりは困難であるとステレオタイプな考え方をしていることが示唆された。発達障害のある学生と周囲の学生間でどのような援助が行われているかは調査研究が少なく、発達障害の理解と知識の啓発と同時に、適正な対処方法や支援のあり方を実践的に学ぶことが重要であると考えられる。

大学内で発達障害のある学生に生じる困難さ

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（2008）の「発達障害のある学生の支援に関する全国調査」では、大学等で把握している発達障害のある学生数は予想される出現率よりも少なく、発達障害を疑われるが調査対象とならなかった学生が多数潜在していることを指摘している。また桶谷（2013）も、大学では発達障害が未診断の場合が多いことを指摘している。このような場合、発達障害あるいはその疑いがある学生は、自ら支援が必要であると理解していない場合が多い（佐々木・梅永, 2010）。

富山大学学生支援室では修学支援の経験から発達障害のある学生の特有の問題を次のように指摘している（桶谷, 2013）。(1)医学的に未診断の学生が多い、(2)診断の有無に関わらず、適切な自己理解に困難があることから、自分に必要な配慮・支援を自覚していないことが多い、(3)(1)と(2)の理由から学生本人が主体的に配慮の要請行動を起こすことが困難である、(4)苦情・不満や対人関係上のトラブルなどが相談のきっかけとなる学生が多く、当面の問題解決と合理的配慮が直接には結びつかない事が多い。

これら未診断で対人関係の困難性の高い事例の中に、アスペルガー症候群やASDのある学生が多く含まれることが推測される。なぜなら、これらの障害がある学生は、LDやADHDと比較して社会性の障害やコミュニケーションの障害が顕著なために、より深刻な対人関係の問題が生じやす

いと考えられる。ASDのある学生の大学生活上の困難さを考慮し、本研究ではとくに ASD に焦点を当てて検討することとする。

目 的

本研究では、自閉症スペクトラム障害に焦点を当て、その特性によって生じやすい困難さを周囲の学生がどのように理解し、その困難さにどのように対応するのかなど、発達障害特性への大学生の援助意識についての実態を調査する。

Ⅱ. 方 法

調査手続きと調査対象

2013年10月下旬に都内私立大学の心理学部の大学1年生78名(男性28名, 女性50名)を対象に心理学関連の授業において協力を依頼し、次の質問紙調査を実施した。実施時間は40分であり、有効回答件数は78件であった。

質問紙の構成

発達障害のある大学・短期大学・高等専門学校 of 学生向けに作成された自己チェックリスト(佐々木・梅永, 2010) から、アスペルガー症候群および高機能自閉症による困難さとされる16項目を抽出し、その項目内容を学生生活における困難さを抱える学生の具体的なエピソードとして作成した(資料1 困難さのエピソード)。この16項目のエピソードごとに以下の質問を実施した(資料2 質問紙の例)。なお、問4は中根ら(2005)の精神障害事例における市民の社会的距離に関する尺度を参考に作成した。

問1: この困難さを本人自身が解決すべきか、本

人以外の誰かの手助けが必要だと思うか。

問2: この困難さを抱える学生が回答者と同じ教室の学生であった場合、手助けするか否か。

問3: 問2の回答の理由(自由記述)

問4: この困難さを抱える学生に対して、①授業の時に隣に座る、②授業の発表などと同じグループになる、③授業以外の時間におしゃべりをする、④友人としてつきあうという4つの状況をどの程度受け入れられるか。

問5: この困難さを抱える学生が回答者の親しい友人である場合、手助けするか否か。

Ⅲ. 結 果

調査結果を設問ごとに以下のように整理した。なお発達障害特性による困難さのエピソードをもつ学生を「困難を抱える学生」とし、本調査に協力した学生を「回答した学生」と表記する。

問1、援助の必要性について

結果を付表1に示した。本人自身で解決すべきとの回答が60%を超えた項目は、項目6「予定を変更されると納得できない」(82%)、項目7「学業・サークル・バイトの優先順位をつけられない」(69%)、項目9「空き時間をつぶせない」(65%)、項目3「レポートに自分の意見が書けない」(60%)であった(Figure 1)。

本人以外の誰かの手助けが必要との回答が60%を超えた項目は、項目12「思い込みが激しい」(83%)、項目8「複数の作業を同時にこなせない」(81%)、項目11「会話が苦手」(77%)、項目14「他者の発言を理解できていないのではと不安」(74%)、項目16「友人の名と顔が一致しない」

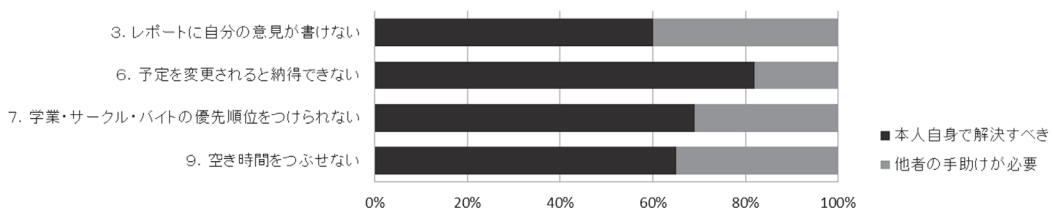


Figure 1 本人自身で解決すべきとの回答が60%超えた項目

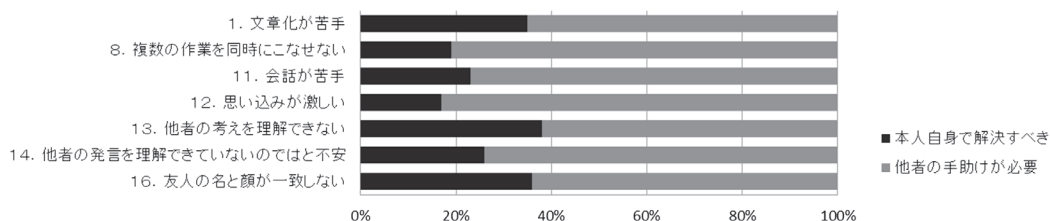


Figure 2 他者の手助けが必要であるとの回答が60%を超えた項目

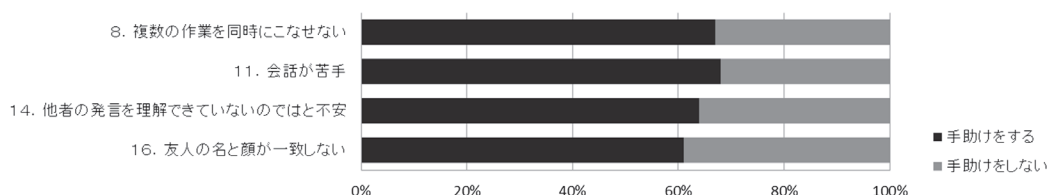


Figure 3 手助けをするとの回答が60%を超えた項目

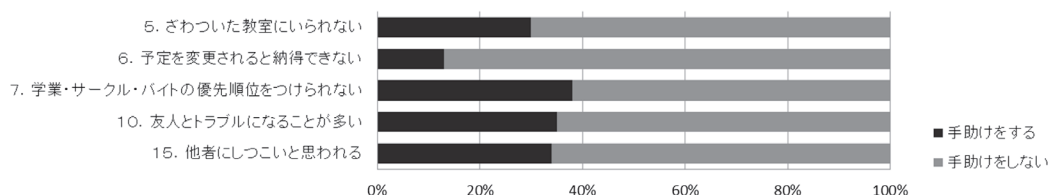


Figure 4 手助けをしないとの回答が60%を超えた項目

(64%)、項目1「文章化が苦手」(65%)、項目13「他者の考えを理解出来ない」(62%)であった (Figure 2)。

問2、学生間の援助について

結果を付表1に示した。手助けをするとの回答が60%を超えた項目は、項目11「会話が苦手」(68%)、項目8「複数の作業を同時にこなせない」(67%)、項目14「他者の発言を理解できていないのではと不安」(64%) 項目16「友人の名と顔が一致しない」(61%)であった (Figure 3)。

手助けをしないとの回答が60%を超えた項目は、項目6「予定を変更されると納得できない」(87%)、項目5「ざわついた教室にいられない」(70%)、項目15「他者にしつこいと思われる」(66%)、項目10「友人とトラブルになることが多い」(65%)、項目7「学業・サークル・バイトの優先順位が

つけられない」(62%)であった (Figure 4)。

問3、援助の理由について

問2で、手助けするとの回答の上位2項目は、項目8「複数の作業を同時にこなせない」、項目11「会話が苦手」であった。それらの項目の問3の手助けする理由としては、「自分（回答した学生自身）も苦手であるので助けが必要」、「学生同士で協力して手助けすることができる」、「手助けの方法が沢山ある」などを記載している。

問2で手助けしないとの回答の上位2項目は、項目6「予定を変更されると納得できない」、項目5「ざわついた教室にいられない」であった。問3の手助けしない理由としては、「手助けのしようがない」、「本人自身の責任」、「学生同士ではどうすることも出来ない」という回答であった。

困難さに対する手助けの手立てが明確に思い浮

かぶとき、学生は手助けすると判断すると考えられる。また、問2において手助けをしないと回答した困難さには、自分自身の責任であると考えられる困難さの他に、学生は手助けをしたいという気持ちはあるものの、その手立てが思い浮かばず、手助け出来ないと判断している可能性があることが推測できる。

問4、社会的距離と困難さを抱える学生の受容について

社会的距離が異なる次4つの状況（①授業の時に隣に座る、②授業の発表などで同じグループになる、③授業以外の時間におしゃべりをする、④友人としてつきあう）において、各々の困難さを抱えている学生を回答した学生が受け入れるか否かのパーセンテージを、Figure 5、Figure 6、

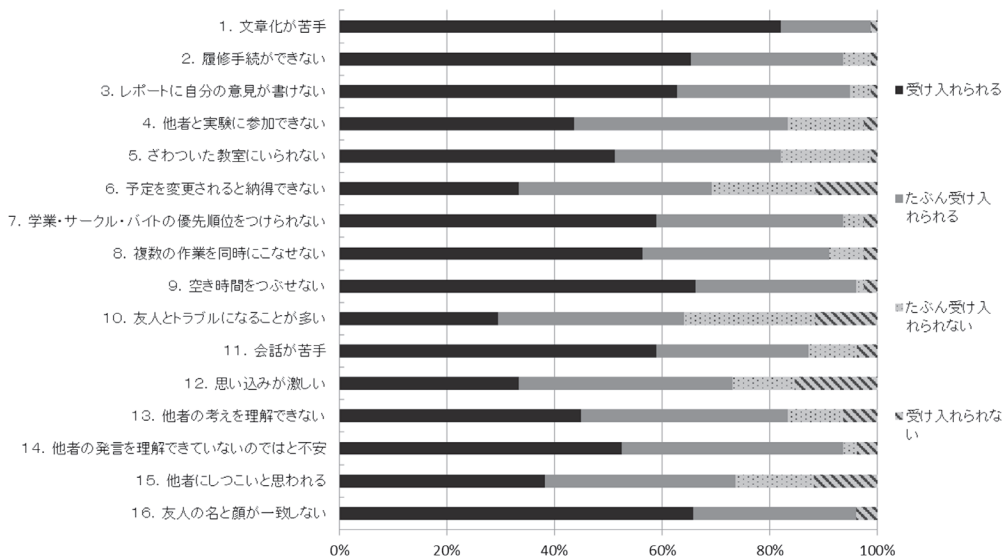


Figure 5 社会的距離とその受容について（授業の時に隣に座る）

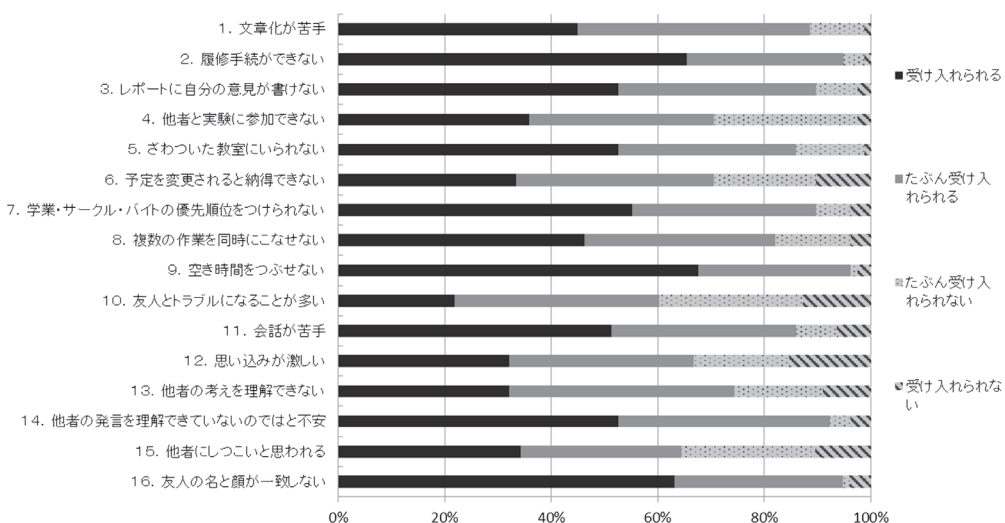


Figure 6 社会的距離とその受容について（授業の発表などで同じグループになる）

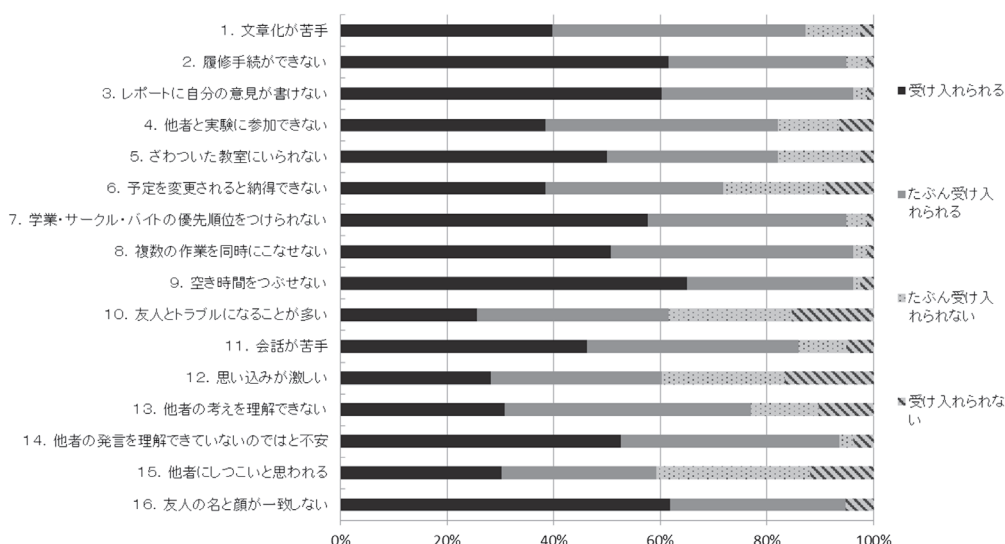


Figure 7 社会的距離とその受容について（授業以外の時間におしゃべりをする）

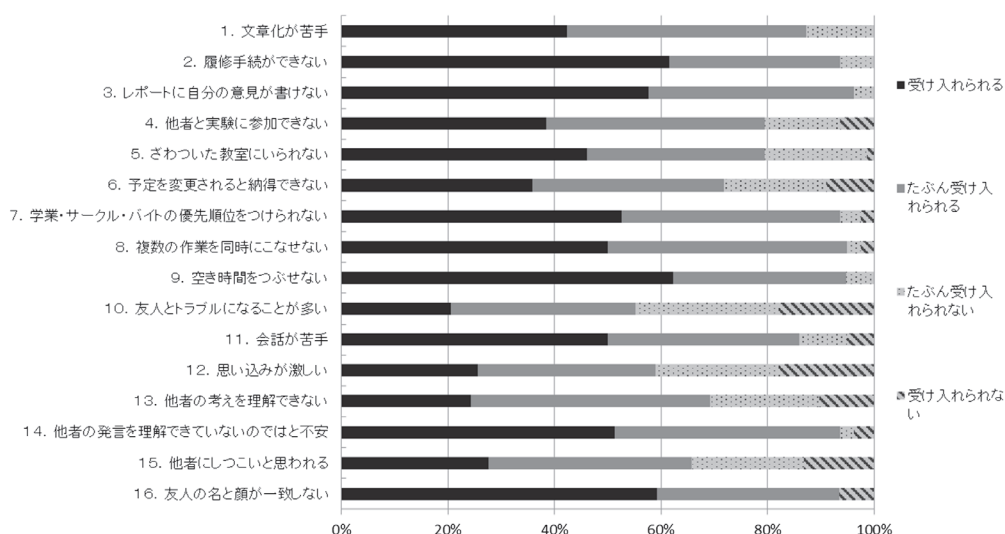


Figure 8 社会的距離とその受容について（友人としてつきあう）

Figure 7、Figure 8に図示した。

①授業の時に隣に座る場合、すべての項目で肯定的回答（受け入れられる・たぶん受け入れられる）が60%を超えた。次に、②授業の発表などで同じグループになる場合、肯定的回答が60%以下の項目は、項目10「友人とトラブルになることが多い」（60%）であった。③授業以外の時間におしゃべりをする場合、肯定的回答が60%以下の項目は、

項目12「思い込みが激しい」（60%）、項目15「他者にしつこいと思われる」（59%）であった。④友人としてつきあう場合、肯定的回答が60%以下の項目は、項目10「友人とトラブルになることが多い」（55%）、次いで項目12「思い込みが激しい」（59%）であった。

以上、肯定的回答が60%以下の項目は、項目10「友人とトラブルになることが多い」、項目12「思

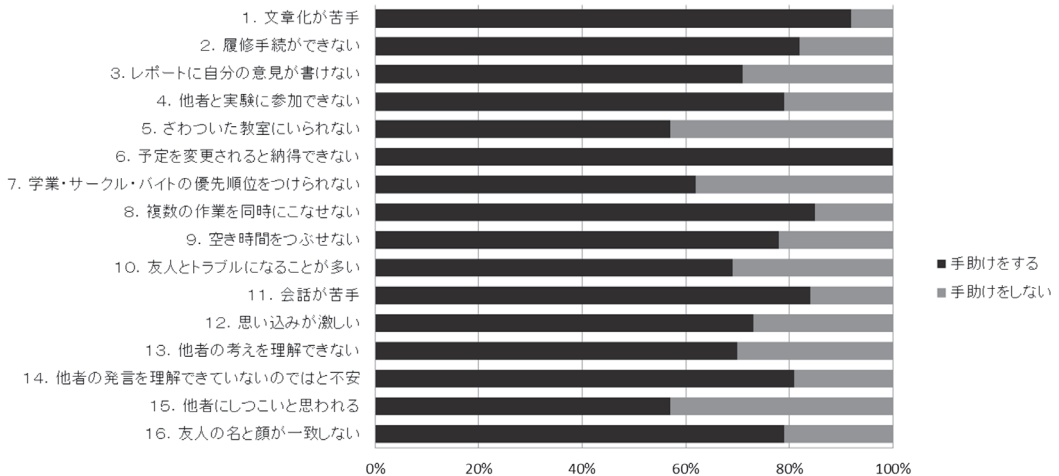


Figure 9 親しい友人の場合の手助けの有無

い込みが激しい」、項目15「他者にしつこいと思われる」など、ASD 特性の状況認知の悪さや固執性から起きる対人関係の葛藤の表れを示唆する項目である。このような困難さは友人関係を形成する際に障害となりうることを示唆される。

問5、親しい友人の場合について

困難さを抱える学生が回答した学生と親しい友人である場合、ほぼ全ての項目で手助けをするとの回答が60%を超えた (Figure 9)。60%を割ったのは、項目5「ざわついた教室にいられない」(57%) 項目6「予定を変更されると納得できない」(29%) 項目15「他者にしつこいと思われる」(57%) であった。

IV. 考 察

問1と問2の結果の関連について；学生間の支援と専門的支援

項目6「予定を変更されると納得できない」、項目7「学業・サークル・バイトの優先順位をつけれない」は、問1で本人自身が解決すべきとの回答が60%を超え、問2で手助けしないと回答が60%を超えた項目である。自己の責任で解決すべきことに他者が協から手を出すべきでないと考えるのは理にかなった考えである。このような合

理的な判断がこの結果に反映されているかもしれない。しかし、これらの困難さが障害特性から生じているとしたら、周囲の学生からの理解や援助をえることが難しく、その困難さを抱えた学生にとって解決が難しい問題となる。この結果はこれらの困難さに対しては学生間の支援ではなく、発達障害の理解を基礎とした専門的支援が必要であることを示唆している。

逆に他者の手助けが必要とされても、回答した学生自らが手助けをしない場合にも別の問題がある。問1で本人以外の誰かの助けが必要との回答が60%を超えていても、問2で手助けをするとの回答が60%を超えなかったのは、項目1「文章化が苦手」、項目12「思い込みが激しい」、項目13「他者の考えを理解出来ない」であった。これらの困難さも、学生間での援助が難しく専門的支援が必要な困難さであることを示唆しているといえる。

問4の結果について；社会的距離と学生間の支援

項目10「友人とトラブルになることが多い」、項目12「思い込みが激しい」、項目15「他者にしつこいと思われる」の3項目を除いて、社会的距離の違いに関わらず多くの項目で困難さを抱える学生の受け入れに肯定的な回答が60%を超えた。この結果は学生間の相互援助の点からは好ましい。学

生同士の支援は互いがフィフティー・フィフティーの関係のときに学生間の相互援助が可能となる。大学生の調査では発達障害のある学生との関わりは困難であるとのステレオタイプな考え方もあり(岡本ら, 2012)、発達障害の特性などハンディキャップがある場合には、その学生との関係は敬遠され相互援助的な関わりは成立しなくなる可能性もある。それを端的に表しているのが問4の否定的回答の結果であろう。項目10「友人とトラブルになることが多い」、項目12「思い込みが激しい」、項目15「他者にしつこいと思われる」の3項目など、ASD特性の状況認知の悪さや固執性が学生間の潜在あるいは顕在的葛藤となりうる場合、30%から40%の学生がこのような困難さを抱える学生を敬遠することが示された。

この結果は回答した学生がこれらの困難さを抱えた学生との不要な摩擦を避け、その学生との社会的距離を調整しているといえる。しかし、反面、これらの困難さを抱える学生が大学生活で阻害されやすいことを示している。このような問題は学生相談室など学生相談機関で対応されているが(川住ら, 2010)、学生間の葛藤を未然に防ぐための特別な支援のシステムの構築が大学全体の問題として求められているといえよう。

問5の結果について；社会的距離と学生間の支援

問5は困難を抱えている学生が親しい友人であるとの設定で回答を求めた。設問の意図は、発達障害との認識がない場合、個々の困難さのエピソードに友人間の援助意識がどのようなものかを知ることであった。結果は、困難さを抱える学生が親しい友人であった場合は、多くの項目で困難を抱える学生を手助けするとの回答が60%以上であった。60%を割ったのは、項目5「ざわついた教室にいられない」、項目6「予定を変更されると納得できない」、項目15「他者にしつこいと思われる」であった。

これら3つ項目を除けば、問1で本人自身で解決すべきとの回答が90%を超えた項目、問2で手助けしないとの回答が90%を超えた項目において

も、さらに問4で受け入れられないとの回答が60%を超えた項目10「友人とトラブルになることが多い」においても、親しい友人であれば援助するとの回答が60%を超える。この結果は、困難さの内容に関わらず、学生同士の親しさがその援助意識を左右することを示唆している。

困難さを抱えている学生が親しい友人である場合、援助しようとする学生がその困難さがもたらすトラブルに巻き込まれる事態が生じかねない。それを避けるためには、これらの困難さへの適正な対処方法や支援のあり方を学生が実践的に学ぶことが重要である。しかし、その啓発のありようによっては、本研究の結果とこれまでの議論からもわかるように、周囲の学生の態度が同情か拒否か、援助か敬遠かの両極に変化することも考慮し、慎重な啓発活動が重要であるといえる。これは今後の大学における発達障害への支援のあり方に関わる大きな課題といえる。

今後の課題

本研究において、発達障害のある学生に対する周囲の学生の支援のあり方を考えるうえでの大切な資料が得られたと考える。しかし、調査対象者は心理学部の大学生であり、支援に関わる職業に就くことを目指す学生も多数含まれる。また大学1年生であり、大学生活を十分に経験していない年齢でもある。それらのバイアスを考慮すると対象者を他の学年へと広げ、また他の学部の学生を調査対象として援助意識の違いを検討することが必要と考える。

また、本研究では、自己チェックリスト項目や問4で用いた尺度に関して、未だその妥当性が実証されていない尺度を用いている。また、本研究の調査では、対象者の発達障害というバイアスが調査に与える影響を考え、発達障害に関連する調査であることを秘し実施している。質問紙で記載した困難さを抱える学生が発達障害のある学生であるということを、対象者が把握している場合、そのことが学生の援助意識にどのような影響を与えるかの検討が必要であろう。

さらに発達障害のある学生のすべてが支援を必要としている訳ではない。過剰な支援はかえって発達障害のある学生の自律を妨げかねない。このような観点から考え学生間の支援が適正なものであるために、大学における発達障害への合理的配慮とは何かを具体化していくことが大切であるといえる。

引用文献

- 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（編著）
（2008）．発達障害のある学生支援ケースブッカー支援の実践とポイントー ジアース教育新社．
- 川住隆一・吉武清實・西田充潔・細川徹・上埜高志・熊井正之・田中真理・安保英勇・池田忠義・佐藤静香（2010）．大学における発達障害のある学生への対応ー四年制大学の学生相談機関を対象とした全国調査を踏まえてー 東北大学大学院教育学研究科研究年報，（1），435-462．
- 中根秀之・中根允文（2005）．精神保健の知識と理解

- に関する研究ー一般地域住民と精神科医，プライマリケア医との比較検討ー厚生労働省科学研究費補助金 こころの健康科学研究事業 平成16年度総括・分担研究報告書．
- 岡本百合・三宅典恵・仙谷倫子・矢式寿子・内野悌司・磯部典子・栗田智未・小島奈々恵・二本松美里・松山まり子・石原令子・杉原美由紀・古本直子・國廣加奈美・高橋涼子・河内桂子・山手紫緒・横崎恭之・日山亨・山脇成人・吉原正治（2012）．発達障害に関する理解と認識ー大学生意識調査ー総合保健科学：広島大学保険管理センター研究論文集，28，1-8．
- 桶谷文哲（2013）．発達障がい学生支援における合理的配慮をめぐる現状と課題 学園の臨床研究（12），57-65．
- 佐々木正美・梅永雄二監修（2010）．大学生の発達障害（こころライブラリー イラスト版）講談社．
- 高橋知音（2012）．発達障害のある大学生のキャンパスライフサポートブッカー大学・本人・家族にできることーリーブルブック．

資料1 困難さのエピソード

1	あなたの周囲で、聞き手・読み手を意識して分かりやすい様に話したり、文章にしたりする事が苦手な学生がいます。
2	あなたの周囲で、どんな科目を履修すればいいのか分からない学生がいます。
3	あなたの周囲で、レポートを書く際に、自分の考えや意見を交えてレポートを書くことが苦手な学生がいます。
4	あなたの周囲で他者と一緒に実験に参加したり、実習に参加することを苦痛だと感じている学生がいます。
5	あなたの周囲で、他者が話しているようなざわついている教室に居ることが耐えられない学生がいます。
6	あなたの周囲で、授業がシラバスに書いてある授業予定と違ったり、急に予定を変更されると納得することが出来ない学生がいます。
7	あなたの周囲で、学業やサークル、アルバイト等の中から自分で判断して優先順位をつけることが苦手な学生がいます。
8	あなたの周囲で、二つ以上の作業を同時にこなすことが難しく、混乱してしまう学生がいます。
9	あなたの周囲で、授業と授業の間に空いた時間が出来てしまうと、その時間を潰すことに困ってしまう学生がいます。
10	あなたの周囲に、クラスの友人や周囲の人とトラブルになることが多い学生がいます。
11	あなたの周囲に、人と会話することが苦手な学生がいます。
12	あなたの周囲に、思い込みが激しく、その思い込みを自分では修正できない学生がいます。
13	あなたの周囲に、他者が考えていることを理解するのが苦手な学生がいます。
14	あなたの周囲に、他者の発言を自分が上手く理解していないのではないかと感じて不安になっている学生がいます。
15	あなた周囲に、自分が納得するまで他者に質問する等、他者からしつこいと思われてしまう学生がいます。
16	あなたの周囲に、クラスメイト等の周囲の人の名前と顔を一致させることが難しい学生がいます。

資料2 質問紙の例

学校で、以下の□の中のような困難性を抱えている学生が、あなたの周囲にいた場合、その学生への援助についてあなたはどのように考えますか、率直にお答え下さい。

例1	あなたの周囲で、聞き手・読み手を意識して分かりやすい様に話したり、文章にしたりする事が苦手な学生がいます。
----	---

問1) この学生に対して、あなたはどのように思いますか？以下からの二つのどちらかに○をつけて下さい。

本人自身で解決すべき

本人以外の誰かの助けが必要だと思う

問2) もし、その学生があなたと同じ教室で学んでいる学生だとしたら、この学生に対して手助けしますか？どちらかに○をつけてください。

手助けする

手助けしない

問3) 問2)で、手助けする、あるいは手助けしないと答えた理由は何ですか？具体的にお書きください。

問4) もし、上例のような学生が、あなたの周囲にいた場合、次のような事柄についてどのように感じますか。一つだけ選んでください。

	受け入れられる	たぶん受け入れられる	たぶん受け入れられない	受け入れられない
① 授業の時に隣に座る。	1	2	3	4
② 授業の発表などで同じグループになる	1	2	3	4
③ 授業以外の時間におしゃべりをする	1	2	3	4
④ 友人としてつきあう	1	2	3	4

問5) この学生があなたの親しい友人だったら、この学生に手助けしますか？どちらかに○をつけてください。

手助けする

手助けしない

付表1 問1と問2の結果

困難さの項目	問1		問2	
	自身で解決すべき	誰かの援助が必要	手助けする	手助けしない
1. 文章化が苦手	35%	65%	55%	45%
2. 履修手続ができない	53%	47%	54%	46%
3. レポートに自分の意見が書けない	60%	40%	41%	59%
4. 他者と実験に参加できない	50%	50%	56%	44%
5. ざわついた教室にいられない	47%	53%	30%	70%
6. 予定を変更されると納得できない	82%	18%	13%	87%
7. 学業・サークル・バイトの優先順位をつけられない	69%	31%	38%	62%
8. 複数の作業を同時にこなせない	19%	81%	67%	33%
9. 空き時間をつぶせない	65%	35%	50%	50%
10. 友人とトラブルになることが多い	44%	56%	35%	65%
11. 会話が苦手	23%	77%	68%	32%
12. 思い込みが激しい	17%	83%	48%	52%
13. 他者の考えを理解できない	38%	62%	54%	46%
14. 他者の発言を理解できていないのではと不安	26%	74%	64%	36%
15. 他者にしつこいと思われる	53%	47%	34%	66%
16. 友人の名と顔が一致しない	36%	64%	61%	39%

Support to the difficulties of the college life by the traits with developmental disorders
—The attitudes of helping of university students for autism spectrum disorder—

Saori Miyazaki¹⁾, Yojiro Nakata²⁾, Hideyuki Satoh²⁾, Satoshi Nagai²⁾, Hanae Tamura²⁾

[Abstract]

In this study, we focused on autism spectrum disorders, and we conducted research about the attitudes toward helping of university students for autism spectrum disorders (ASD).

As a result, if they think that the student with difficulties related to ASD needs the help, but it is difficult to help him not to find how to assist the student. The results also suggest that they change attitudes of helping for the student with the difficulty by their social distance or their relations, on the other hand, if the student was their very close friend, they spare no assistance to help him. From these, regarding the support to the students with developmental disorders, we, as a university, should continue to carefully consider the enlightenment about the knowledge of developmental disorders toward university students.

[Key Word] autism spectrum disorder, college life, attitude of helping,
special needs education